JAPAN SOCIETY FOR INTERIOR STUDIES

JASIS NEWS

NO. 46

2010/1/27

日本インテリア学会会報

■第21回大会を終えて

インテリアの概念

学会長　高橋鷹志（東京大学名誉教授）

本大会は、初日の見学会をはじめとして、翌日の記念シンポジウム・研究発表会・卒業作品展など全て質が高く、充実した時を過ごすことができました。これもすべて大会を企画された北陸大会役員の皆様の努力によるものと厚く感謝する次第です。

五十間長屋は木造建築で100mにも及ぶ長大な空間は初めて体験であり、日本建築にもこのような形態の空間が存在していたことに感銘したのです。また金沢21世紀美術館はこれまでに数回訪れていましたが、その都度空間構成の特異性・新鮮さを楽しむことができ、現代建築が兼六園や周囲の金沢の古い街並みのなかで極く自然と調和していることに感心させられます。

翌日のシンポジウムのテーマは「都市文化におけるエクステリアとインテリア」であり私が近頃関心を持つ問題であり、大いに期待できるものであった。各パネリストの発言はともかく、エクステリアとインテリアとは存在しているのだが、より一体的に捉えるべきだという主張には共感することができた。私の考えでは、内と外との区別は物理的には存在するのであるが、人びとの環境体験上ではエクステリアもインテリアであるということである。その観点から、コーディネーターの宮下孝晴先生がフィレンツェのサンタ・クローチエ教会のフレスコ壁画の修復をされているとのこと。2008年に私も同教会を見学したのだが、礼巡堂に屋根は架かっているものの、入口を入った部分の空間はエクステリアであると感じたのである。

ここで話題は大会から離れる。建築学会の「建築雑誌」６月号の特集が「インテリアを語る」であったことを御承知の方々も多いかと思う。この企画について、当学会への接触がなかったことも不満であるが、その内容に関して大きな疑問を感じている。話題が「商業」をベースとしたインテリアデザインの概念やインテリアデザイナーの仕事に限られていたからである。更にまとめの原稿の中で、「今まで特に建築界のなかで殆ど語られていなかった『インテリア』について」という記述に違和感を持った。原始の時代から建築とインテリア・エクステリアとは不可分の一体として存在したのである。この問題について会員諸氏からの御意見をお聴かせ下されば幸いである。

■第21回大会の報告（第1報）

大会実行委員長　棒田邦夫（金沢学院大学）

□はじめに

第９回大会を金沢で開催して11年。数年前より小松啖一氏（※1）が「大会の開催地も全国を一通り回っただろうから、そろそろ金沢開催の依頼が再びあるかもしれない」と話していて、心の準備はしていたのですが、いざ開催となると、何から、どう始めて、どう動いたらよいのか、右往左往の１年でした。また、２回目の金沢開催とはいうものの、前回は関西支部の一員としての開催であり、北陸支部としての単独開催は実質これがはじめての開催でした。ともあれ多くの会員が参加してくれたことに実行委員一同心より感謝しております。

※１．前北陸支部長・理事

□大会の概要

第21回大会をお受けして、10月に実行委員会を立ち上げ、早々に開催日、県・市への助成書類の作成と、実施のための予算を決めました。また、開催にあたりテーマや見学地の話題も出て、次年度に向けての大会内容が活発に話し合われました。年明けには大会の骨格ともいえるテーマが金沢の文化「内なるインテリア／外なるインテリア」となり、これに基づいてエクスカーションの見学会、シンポジウム、懇親会の内容が検討されました。また、この時期季節が季節だけに寒かったり、雨、風の悪天候でエクスカーションの進行が妨げられないよう会場を一つにし、参加者の利便性を考慮しました。

見学会は短い時間での見学を考慮して、見学地を金沢城、金沢21世紀美術館、尾山神社の３カ所とし、徒歩でも回れる近隣にまとめました。金沢駅西口を定刻の午後１時に出発し、最初に訪れたのは金沢城。見た方も多い中、ガイドさんの案内もあり、みなさん大変熱心に聞き入ってくださいました。次に訪れたのが金沢21世紀美術館です。この美術館は体験型のアートが数多く、思い思いの視点で楽しんでおられました。また、設計、施工に携わっていた吉村氏の案内で、建物のコンセプトやこぼれ話など直に聞けて、見学の喜びも増したようでした。最後に訪れたのが尾山神社です。この時期七五三の参拝行事で忙しく、内部の見学ができなかったのが残念でした。が、ステンドグラスの入った正門や小堀遠州の庭など外回りの散策を満喫できたようでした。

シンポジウムは、大会のテーマに沿って「都市文化におけるエクステリアとインテリア」と題したテーマで、イタリアの中世及びルネッサンス期のフレスコ画研究の大学教官をコーディネーターに、金沢市が運営するコミュニティバスデザインを手がけた大学教官、文化としての和菓子を模索する菓子職人、現実世界には存在しない立体・空間・音の情報科学に携わる大学教官をパネラーに招いて討論を行いました。文化の街、金沢らしいパネラーの話に参加者の方々は興味津々に聞き入っていました。

懇親会では、「素囃子」という金沢の伝統芸能で、華やかな舞を皮切りに懇親会が始まりました。宴の後には、名誉大会長石田学長の歓迎あいさつ、高橋会長の大会開催あいさつに続いて、小松喨一氏の乾杯で懇親の宴が和やかに行われました。披露された「素囃子」はお茶屋遊びで披露する芸のひとつで、「宝船」「勧進帳」を演じていただきました。披露後には妓子衆のお酌もあったりで終始にこやかに話が弾んでいました。

口頭、パネル発表は、口頭発表３室、パネル発表１室で果敢な発表・質疑が行われ、ほぼ時間通りに進行できました。途中１室でノートパソコンの不具合が障じましたが、すぐに替わりのノートパソコンで対処し発表を続けることができました。また、お昼の休憩時間を利用して第16回卒業作品展の審査も行われ、出品校の思い思いの表現に目を凝らしながら４点の入賞作品を選ぶことができました。

□最後に

大会の実行委員長として大任を任され、無事に終わったことに先ずはホッとするとともに、この大会の２日間天気がよく、寒くなかったことがうれしかったです。前回（第９回大会）は雨やアラレが降りそそぎ、寒くて、風も強く荒れた天気でしたから、晴れることを願う毎日でした。また、この時期新型インフルエンザの感染がピークになると報道されていましたので、看護士さんを配置して感染者に対処しましたが、幸いにも症状を訴える参加者がいなかったことも大変うれしかったです。一方、今大会の試みとして大会のホームページも開設し、速い情報伝達に務めました。しかし、このホームページは知りたい情報と、知らせるべき情報のフォーマットが不十分であったために参加者の一部に余計な混乱を招いてしまい、大変申し訳なく思っております。それでも、ホームページは速報性があり、印刷費と発送手間・時間の短縮を図ることもでき、今後の課題として整備、検討をお願いしたいと思います。

なお、今大会のご支援あるいは助成、協賛をしてくださった学校法人金沢学院、石川県・金沢市、団体、企業の方々には心から感謝申し上げます。

見学会：金沢21世紀美術館

見学会：尾上神社

見学会：金沢城

懇親会：高橋会長挨拶

懇親会：会場風景

口頭発表会場

パネル発表会場

第16回卒業作品展

■第21回インテリア学会大会に参加して－1

長山洋子（文化女子大学）

今年の大会の開催地は金沢学院大学。金沢駅からバスで30分程、のどかな風景の中を揺られていくと小高い丘の上に目指す大学はありました。市街が一望できる立地に、白が印象的な低層の校舎が緑の中に佇んでいます。自然に恵まれた環境の中で伸び伸びと過ごす様子を想像すると、新宿という都会の喧騒の中で慌ただしく日々に流されながら暮らす私には羨ましくもあり、この一日は心休まるひと時になりました。

学会の大会に参加することの目的は、各自の研究成果を発表し、専門分野の方々、異分野の方々と意見交換を通して見識を広げる事と思っています。そして全国に分布する普段はお会いする事のない様々な方々と交流を深める事でもあります。研究発表の場、見学会・懇親会…様々な場面で視野を広げ、気持ちを新たにできるのが魅力です。

さらに、もう一つは、開催地を楽しむことです。今年は金沢で開催と聞き、加賀百万石、前田藩の伝統的都市を訪ねるチャンスが出来たと内心ワクワクしたものでした。今回は、時間の都合で見学会には参加出来ず残念でしたが、短時間で散策した金沢市内の整備された用水路、にし・ひがし茶屋、武家屋敷など町全体に息づく百万石の伝統を堪能しました。

是非行きたかったのは「金沢21世紀美術館」。やはり時間の都合で夜になってしまったのですが、ガラスの壁からの灯りが周囲を照らし、道しるべとなっているのが印象的でした。この美術館はどこからでもアプローチ出来て正面と思わせる正面がありません。市民は開放された無料のブースを気軽に訪れ、思い思いに楽しんでいるようで、美術館の新しい姿を見ることが出来ました。

私自身、思う存分楽しんだ金沢大会でした。このような大会を開催してくださった北陸支部の方々、金沢学院大学の方々、ありがとうございました。心から御礼申し上げます。

■第21回インテリア学会大会に参加して－2

早野由美恵（東北芸術工科大学）

この度、自分の行って来た仕事の成果を、始めて本学会にて発表させて頂きました。これまでは、空間のデザインを行う自分の仕事における、新たな視点や知識を得る場として参加してまいりましたが、しかし、発表となると心構えは全く異なります。かつて無い程の緊張で臨みました。

私の本大会への参加は、見学会から始まりました。まず訪れた場所は、壮大な五十間長屋や菱櫓のある金沢城址です。現在に生きる匠の技のすばらしさを味わう事の出来る内部空間では、一時、己の緊張状態を忘れてしまう程でした。その後21世紀美術館、尾山神社と見学会は続きました。それらの建築物に加えて私が感動したのは、街並の美しさです。見学のコースでは一方通行の

道路が多かったらしく、目前の21世紀美術館に入るため、大きく街を迂回しなければ目的地へ辿り着けませんでした。しかしそれは、私にとっては幸いでした。個々の建物だけではなく、街並全体が歴史の重厚さを保ちながら、美しく存在していました。これは、行政や住民の方々の高い意識や努力無くては、存在しないであろうものです。

その後の、宮下孝晴先生のコーディネイトのもと、３名のパネリストの先生方による、全く異なるフィールドからのシンポジウムは、新たな視点からの発想を得る事ができました。懇親会でも、金沢ならではの趣向を凝らしたものであり、歓談の場を盛り上げる配慮で溢れていました。文化と伝統、そこに生きている人々のもてなしの心と市民性を学ぶ事が出来た事は、とても有り難いことでした。

翌日の発表においては、緊張の中にも穏やかな雰囲気で進められ、発表も無事に終わりました。最後に、１日目のシンポジウムのパネリストのおひとりである、村上先生のお店のお菓子を買って帰る事が出来なかった事が、唯一の心残りのことでした。

■第21回大会研究発表一覧

Ａ　論文発表部門

【計画　住宅・生活】

座長　加藤　力（宝塚造形大学）

001　都心部賃貸集合住宅における居住者のライフスタイルと住まい方（１）　－調査の概要と居住者の基本属性－；渡邉裕子（文化女子大学）・沢田知子・丸茂みゆき・谷口久美子

002　都心部賃貸集合住宅における居住者のライフスタイルと住まい方（２）　－家族構成からみた居住者のライフスタイル－；谷口久美子（文化女子大学）・沢田知子・丸茂みゆき・渡邉裕子

003　都心部賃貸集合住宅における居住者のライフスタイルと住まい方（３）　－住まい方とインテリアの特徴－；丸茂みゆき（文化女子大学）・沢田知子・谷口久美子・渡邉裕子

004　こだわり生活定量調査（その１）　－属性別こだわり生活テーマについての考察－；沢辺泰代（積水ハウス（株））・河崎由美子

005　こだわり生活定量調査（その２）　－こだわり生活と欲求因子についての考察－；河崎由美子（積水ハウス（株））・沢辺泰代

【計画　インテリア計画１】

座長　長山信一（富山大学）

006　住宅におけるサニタリー空間の構成手法に関する研究；市原瞳（広島工業大学）・平田圭子

007　現代インテリアに関する研究　その１　現代インテリア研究の必要性；大内孝子（東京都市大学）・川島平七郎・齋藤裕子・長山洋子

008　インテリアにおけるパターンコーディネートの実証考察　Ⅱ；小宮容一（芦屋大学）・井上徹

009　空間の自己化とその表出に関する研究　その11　フランス人学生と日本人学生の比較－（１）画像からみる表出特性；松田奈緒子（京都工芸繊維大学）・加藤力

010　インテリア空間に表出される精神の病みに関する調査研究－その２　空間と精神の病みについての評価方法の提案－；加藤力（宝塚造形芸術大学）・松田奈緒子

【計画　インテリア計画２】

座長　直井英雄（東京理科大学）

011　新潟県中越沖地震における応急仮設住宅の実態と問題点；飯田裕樹（日本大学大学院）・若井正一

012　住まい方とエネルギー消費に関する調査研究　その２　10分間測定法を用いたエコメニュー実施による省エネ効果＜中間期＞；高橋正樹（文化女子大学）・長山洋子・松本吉彦・下川美代子

013　住まい方とエネルギー消費に関する調査研究　その３；住まい方と電化製品の使用状況調査から見たエネルギー消費；長山洋子（文化女子大学）・高橋正樹・松本吉彦・下川美代子

014　デジタル一眼レフカメラを利用した壁画の色彩調査；矢田部佑己（金沢大学大学院）

015　「CRAC!」の作風や作中椅子の歴史・文化的位置づけ　アニメ作品「CRAC!」におけるロッキングチェアの意味の研究（その１）；太幡英亮（名古屋大学）・橋田貴彦・及川幸太・角田知浩・橋本順哉

016　椅子の登場場面と登場人物の行為からの分析　アニメ作品「CRAC!」におけるロッキングチェアの意味の研究（その２）；橋田貴彦（東北文化学園大学）・太幡英亮・及川幸太・角田知浩・橋本順哉

017　モダンデザインの背景を探る　アバンギャルド住宅出現にみるクライアント像－その２－；塚口眞佐子（大阪樟蔭女子大学）

【計画　領域・空間】

座長　若井正一（日本大学）

018　知的障害児施設の領域形成行動に関する研究　大舎型・小舎型施設における事例研究；藤井容子（東京

大学大学院）・西出和彦

019　個体領域の重なりの観点から見た「R.ソマーの実験」に関する一検討；大竹宏之（東京理科大学大学院）・太田剛寛・久保田一弘・直井英雄

020　テーブルトップ・ファジィ領域の基礎的研究；彭瑞玟（台北科技大学）

021　パーソナル・テーブルトップ領域の基礎的研究；林玉婷（台北科技大学大学院）・彭瑞玟

022　欧米における幼児期の子ども部屋の使われ方ー住まいの絵本からの分析ー；北浦かほる（帝塚山大学）

023　茶室における「亭主」と「客」の座の位置；渡辺秀俊（文化女子大学）・沢田知子

【計画　各種施設】

座長　西出和彦（東京大学）

024　スーパーマーケットの企画による地域との関わりについての研究；向井智之（広島工業大学）・平田圭子

025　オープンプラン小学校における児童の居場所選択に関する考察　ー学齢による変化と姿勢の多様性についてー；吉村祐美（千葉工業大学大学院）・橋本都子・倉斗綾子・高橋鷹志

026　美術館の展示空間におけるヴォリューム構成に関する研究；荒木志織（椙山女学園大学）・橋本雅好

027　都市歩行者空間の空間構成に関する研究；岡崎照（大阪産業大学大学院）・ペリー史子・榊原和彦

【歴　　史】

座長　河田克博（名古屋工業大学）

028　C・R・マッキントッシュの家具デザインの特徴（その６）　C・R・マッキントッシュのインテリアデザインに関する研究（その10）；高橋敏郎（愛知淑徳大学）

029　システィーナ礼拝堂における芸術空間の変遷　ースペースデザインの視点からの考察ー；下村滋美（金沢大学研究員）

030　『ウルビーノのヴィーナス』における室内空間とヌード；ーティツィアーノの作画意図ー；東田舞（積水ハウス（株））

031　ヨセフ・フランクのインテリアデザインに関する研究　ファルステルボ・夏の家　スウェーデン；八代美智子（名古屋造形大学）

032　戦前における日本の客船インテリアの特徴；織田茜衣（佐川印刷（株））・田畑博子・片山勢津子

【計画　教育コーディネーター】

座長　北浦かほる（帝塚山大学）

033　レッド＆ブルーを題材とした職業訓練のための教材開発；加島守（職業能力開発総合大学校）・小川和彦・和田初美

034　模擬家屋を用いた内装施工実習に関する一考察；小川和彦（職業能力開発総合大学校）・徳富肇

035　中国における住まい・インテリア教育の可能性に関する一考察；朴美玉（宇都宮大学大学院）・陣内雄次

036　部屋からスペースへ／ハマースホイの室内画に見るインテリアの近代；灰山彰好（studio HAIYAMA）

037　インテリアコーディネータの業務の実態　インテリアコーディネータの現状と課題　その１；角本亜弥（パナソニック電工ホームエンジニアリング（株））・奥村美鈴・片山勢津子・加藤力

038　インテリアコーディネーターの業務に対する評価　インテリアコーディネーターの現状と課題　その２；奥村美鈴（ドワンゴ（株））・角本亜弥・片山勢津子・加藤力

【人間工学　①】

座長　白石光昭（千葉工業大学）

039　学習机の囲み空間による集中力に関する研究（１）ー感性による評価ー；西隆明（早稲田大学大学院）・道垣内まゆ・飯島絵里・木戸大祐・林田和人・渡辺仁史・淺田育男・石井賢俊・下岡伸行

040　学習机の囲み空間による集中力に関する研究（２）ー動作による評価ー；道垣内まゆ（早稲田大学大学院）・西隆明・飯島絵里・木戸大祐・林田和人・渡辺仁史・淺田育男・石井賢俊・下岡伸行

041　人の開閉行動における取っ手の視覚情報に関する研究；西山紀子（京都橘大学）

042　トイレブースにおける折戸と開戸の特性；高橋未樹子（コマニー（株））・沼田真琴・上野義雪

043　インテリア空間における動線の有効利用に関する研究（３）；ー急な曲がり歩行における縦手摺の役割ー；穴沢舞（千葉工業大学大学院）・上野義雪

【人間工学　②】

座長　藤村盛造（デザインオフィスＦ＆Ｆ）

044　正座時の身体負担軽減に関する基礎的研究；西岡基夫（大阪市立大学）・皆川奈央

045　人体系・準人体系家具及び設備機器における高さ寸法の意味；上野義雪（千葉工業大学）・上野弘義

046　からだにあったいすの定義への提案　ーいすのプロトタイプの精密測定法の開発ー；浅田晴之（（株）岡村製作所）・小原二郎・小熊誠次

047　いすの支持面諸元の精密測定機の試作；内田和彦（（株）岡村製作所）・白井信人・小原二郎・小熊誠次

048　素材の違いによる座り心地と姿勢の比較　～会議用椅子からの考察～；白石光昭（千葉工業大学）

B　パネル発表部門

【設計・デザイン他】

座長　高屋喜久子（金沢学院大学）

049　FENCE HOUSEⅢ　インテリアとしてのOrganicUnity；今井裕夫（京都橘大学）

050　インテリアブロックの用途検討；松崎元（千葉工業大学）

051　A Concept Design of Domestic Waste Containers for Colleges；楊順發（台北科技大学大学院）・彭瑞玟

052　インタンジブル・ドア（気配を消す扉）−ユニバーサル・デザイン・ドア−　；長山信一（富山大学）・小嶋健一

053　幼児期の子どもだちの「居場所」に関する研究−幼稚園の絵本の部屋における行動観察から−；木村直子（鳴門教育大学）

054　女性の視点からの民家再生におけるインテリア計画；早野由美恵（東北芸術工科大学）

055　座り心地のいい椅子；川口瑞穂（豊田信用金庫）・高橋敏郎

■第21回大会研究発表講評

□計画　住宅・生活　　座長　加藤　力

001〜001は都心部賃貸集合住宅の居住者のライフスタイルと住まい方に関する一連の調査研究である。都心部に建つUR都市機構の「シティーコート目黒」と「アクティー三軒茶屋」の２つの賃貸住宅を対象として、そこに住む居住者のライフスタイルといわゆるその住まい方調査である。UR都市機構は居住者のライフスタイルの多様化に対応するためさまざまな提案型タイプ住戸やKIS住宅を提示しつつ住要求に応えてきた。こうした都心型住居に住まう者を対象とした調査である。

まず、居住者の基本属性（001）については家族構成、世帯主の年齢、職業、性別等について都心居住者の特性が抽出されている。これについての要因比較は定かにされていないが、やはり都心型住宅の故の特性であろうか。なお、入居理由については交通や生活の便利性についてが、その一番の理由であることは理解できる。だが、UR都市機構の建物だからと云う理由が極めて多いが、その理由の詳細を聞きたいものである。多様な住戸プランの故なのか、あるいは家賃か、都市機構の持つ環境や安全対策の為なのか？

次にライフスタイル調査（002）である。遅寝、遅起き、自由時間もたっぷり、家の近くでの外食や友人との交流も多いなど人もうらやむ都心居住のエンジョイライフの生活ぶりを浮かび上がらせている。家賃の高いのは当然と云うやっかみも浮かぶ。住環境の良くなることは結構なことであるが、ここでも格差社会の一断面を見る気がした。

さらに、住まい方とインテリアの特徴（003）である。ここでは調査中で特徴を持った９事例が提示されている。こうした箇々の事例をどのように普遍の結果にまでにたかめるかが今後期待されよう。

こうした調査研究の難しさ、大変さは調査をした者でないとわからないが、その成果はおうおうにして、散漫になりがちとなる。よほど狙いを定めて、結果を収束させて行くことが必要でないか、と感じた。

004〜005はどのような人が何にどのくらいこだわりを持って生活するか、と云うこだわり生活定量調査である。004では属性別のこだわり生活に関し抽出を試みており、大きく一般的な傾向は指摘されている。こだわりを持たずに生活している人もあるが、これも一種のこだわりのうちか？こだわる人はもっと、こまかい部分にこだわって生活をするはずであるが、どうやらここでのこだわりはそれほど強いこだわりを指してはいないそうである。

005はこだわり生活に対するその心理生理的欲求要因と云う、きわめて難しく、崇高なテーマに取り組んでいる。マズローの欲求段階をベースに作成された調査で、「熱中系」「一人おこもり系」ビジュアル系」など８つの欲求因子が抽出されており面白い。が、人のこだわりに対する深層は一人一人固有なものであって、それは底に潜んで伏流していることは云うまでもない。

□計画　インテリア計画１　　座長　長山信一

006　本研究は、サニタリー空間がライフスタイルにおいて持つ意味を再確認しながら、それに伴う、浴室・トイレ・洗面所の構成のあり方について、建築雑誌『住宅特集』から事例を抽出し、施主の要望と現状の住宅のサニタリー空間のあり方を調査・分析した。サニタリー空間のリビングとトイレのプライバシーという観点から、住宅の中のサニタリー空間のあり方について分類し、考察した。しかし、水回りをコアとして考えた時、サニタリーとキッチンの近接関係を調査すべきではないかとの質問が有り、活発な議論が起こった。若手研究者に対する期待感の高まる発表である。

007　本研究は、学会創立20周年を契機に、関心を共有する会員を主体に、実際にインテリア作品を見学しつつ、継続的に研究を進めている。研究会の発足から１年、現代インテリアとは何か、どう理解するか、議論と作業を続けてきた過程を整理して今回発表した。主たる内容は、研究のロードマップと当初の段階で検討すべきキー

ワード群の設定の考え方である。出発点はできたとのことであるが、建造物を調査する場合、コンセプト抜きの、キーワード分析のみで解明することは、本質を見失う恐れが有るのではないかとの質問があり、活発な議論が起こった。

008　本研究は、1998年から2006年までの研究「インテリアのパターンコーディネートに関する考察」の結論を受けて、建築・インテリアの実例を取り上げて実証的に考察した。例１．クリスタル・ブリック／山下保博は正方形、例２．SUMIKAパビリオン／伊東豊雄建築設計事務所は６角形の変形、例３．ナミックステクノコア／山本理顕設計工場は自由曲線擬き（実際には円弧の連続）、とパターンコーディネート分析を行った。例１・２は構造を含むコーディネート、例３は設計デザインコンセプトによるコーディネートと言える。すなわち、パターンコーディネートの必然性・必要性に多様なアプローチがあることが検証された。例２・３に対応した有機的な空間パターンが必要ではないかとの問いに、パターンの複雑化は避けたいとのこと。

009　本研究は、「インテリア空間には住み手の自己が投影される」との観点から、インテリア空間と自己との関係について扱った。特に、文化の違いによってインテリア空間を自己化する過程や表出された実態、あるいは意識はどの様に異なるのか等に関して調査し、国際比較することを目的として、造形教育を受けたフランス人学生と日本人学生との比較を試みた。写真撮影法による心理的解析によると、撮影されるアイテムや表出の仕方に差異は見られないが、撮影内容の傾向に違いが見られた。日本人学生は、機能的なものに対して自己を結びつけているのに対し、フランス人学生は、住み心地や自分の居場所と言ったものに価値を置く傾向が見られた。その調査内容に関して活発に議論された。

010　「部屋はそこに住まう者の心を映し出す鏡である」が主題である。日本の若者を対象にした一連の研究の中で、実態とプロトコルから、部屋に表出する住み手のインテリア行為（しつらい行為）の背景に、「意識」「行為」「時間」の３つのキーワード（軸）が浮かび上がった。キーワードを手掛かりに、精神の有り様とインテリア空間に対する投影状況について論考を進めた。結果、インテリア空間と住まう者の精神の関係について①要素−時間評価、②表出−意識評価、③構成−行為評価、の３表を用いる評価方法が提案された。表の中心部は、通常的でありふれた状況であると判断される範囲で「通常域」。通常域を取り囲む周辺部分は、特定の傾向が認められる範囲で「分別域」。分別域の外側に位置する周縁部分は、ある程度偏った状態にあると判断される領域で「偏向域」と名付けた。偏向域に同一人物が同時に分散してプロットされる場合には、問題が存在する可能性を示唆していると結論付けた。引き籠もりの具体的な症例も紹介され、活発に議論が交わされた。

□計画　インテリア計画２　　座長　直井英雄

011は、新潟県中越地震における応急仮設住宅を対象に、その居住実態や生活上の問題点について、聞き取り調査を通して記録したものである。阪神・淡路大震災のときもそうであったように、このような地道な調査の蓄積は、将来に向けての貴重な基礎資料となるものといえる。今後の展開も予定しているようなので、ぜひ役に立つ資料を残していただきたい。

012は、10分間の測定だけで省エネ効果が確認できる、筆者らの開発になる省エネ体験プログラムを用い、住まい方による電気エネルギー消費削減効果の程度を把握した調査研究である。調査の結果として、既報その１で報告した冬期における削減効果よりも小さかったものの、本報で対象とした中間期においても、３割程度の削減が確認できたとしている。また、013は、この続報として、生活パタンとエネルギー消費の関係に焦点を当てて調査したものであり、結果として強い関係が見られたことから、住まい方を知ることでその家庭の電気エネルギー消費が推測でき、その家庭に合ったエコメニューの提案が可能になるとしている。この研究で提案された省エネ体験プログラムは、研究上の意義にとどまらず、現実の省エネ行動の推進にもおおいに寄与できるツールたりうるものと評価できる。今後も、この方向の研究の進展を期待すると同時に、現実場面での適用・普及にも努めていただくことを希望したい。

014は、絵画などの色の記録が、様々な条件により微妙に違ってしまうという現実に対し、デジタル一眼レフカメラを用いてこれを簡易にかつ忠実に再現できるシステムを提案したものである。きわめて有用なツールの提案として評価できるが、このシステムの実用性の検証等については今後に期待したい。

015および016は、有名なアニメ作品を対象に、作中に登場するロッキングチェアーの意味や歴史・文化的位置づけを考究した研究である。興味深い研究であるが、願わくば、単発の研究で終わるのではなく、一連の研究として、あるいは多角的に展開される研究として発展させていただきたい。

017は、モダン住宅における施主像を明らかにし、モダンデザインの成立におけるその役割について、事実にもとづく考究を加えた研究である。モダンデザインの成立については、もちろん建築家の業績が大きく評価されているが、それを支えた施主の存在とその意義については、ややもすると軽く扱われてきた感がある。その再考を迫る興味深い研究と評価できる。

□計画　領域・空間　　座長　若井正一

018（藤井、西出）は、知的障害児施設を対象に相部屋を主体とした従来の大舎型の施設と小規模な個室を主体とした近年の小舎型の施設を比較事例に、行動観察調査により児童の居場所選択の実態を把握して、個室の有無や規模の大小が領域形成に与える影響について考察したものである。その調査結果から、大舎型施設では居室に滞在する傾向がみられ、小舎型施設では共用空間に滞在する傾向がみられたことなどを報告した。

019（大竹、他３名）は、個体領域（パーソナル・スペース）の概念を建築空間の設計に結び付ける研究の一環として、ロバート・ソマー著「人間の空間」の中に掲載されている矩形テーブルにおける座席選択の場面を事例にして、着座者相互の個体領域の重なりからみた関係性について検討したものである。特に、個体領域の具体的な平面寸法から重なり面積を算出して、その面積率から着座者同士の親密性などを関係付ける試みは、興味深い。

020（彭）は、テーブル周囲の着座者が、机上の領域において「自分の領域」または「自分のではない領域」と認識する領域と、その中間領域の「ファジィ領域」について実験的に検討したものである。テーブルの形態の違いによって各領域が変容することなどが報告された。

021（林、彭）は、前報と同様の主旨のもとに、形態が異なる３種類の机を対象にして、その机上面でランダムに置かれたグラスが自分のものかどうかを回答する実験を行い、机上面の「自分の領域」について検討したものである。前報とともに、今後の展開に期待したい。

022（北浦）は、欧米における子育て環境と子ども部屋のあり方について、国内外の住まいの絵本を丹念に分析して比較検討した内容を報告した。特に、欧米では寝室で親が子どもに絵本などを読み聞かせる習慣から多様な絵本が多いのに対して、日本の絵本からは、子どもの躾や自立を促すような内容のものが少なくないことなどを報告した。今後の子ども部屋のあり方を検討する上で、新たな視点からの分析であり、今後の展開に期待したい。

023（渡辺、沢田）は、茶室における「亭主」と「客」の位置・距離・視線の高さの関係をもとに、座礼と立礼における亭主と客の座について分析を行ったものである。

その結果、位置関係から、座礼では亭主の右前方に正客が座り、立礼ではその関係が多様となること、距離分布から、座礼に比べ立礼が亭主と正客の距離関係が離れること、目線の高さ関係から座礼・立礼ともに主客の目線の高さが揃っていることなどの知見を報告している。

□計画　各種施設　　座長：西出和彦

024（向井智之ほか）はスーパーマーケットの企画による地域との関わりについての研究であり、地域社会機能の衰退の中で、スーパーの企画の地域活性化への役割を指摘した。地域の現在の状況の中、ハードだけでなく、人々の活動の役割を明らかにすることは意義深い。企画の内容、誰が企画を主催するかなどが活性化に関係するものと思われ、今後の研究の進展に期待したい。

025（吉村祐美ほか）はアンケート調査と行動観察による、オープンプラン小学校における児童の居場所選択に関する考察であり、特に、学齢による変化と姿勢の多様性について注目している。壁のないオープンプラン教室では家具の果たす役割は大きく、この研究から得られる知見は重要である。また少子化による児童数減少への対応についても今後のテーマとなるであろう。

026（荒木志織ほか）は美術館の展示空間におけるヴォリューム構成に関する研究であり、2000年頃以降、展示空間が多様化し、ヴォリューム構成が変化してきていることを明らかにした。これを単なる空間の変化ととらえるだけでなく、展示の方法や内容との関係についても検討できると、さらにこの研究の意義が深まるものと思われる。

027（岡崎照ほか）は都市歩行者空間の空間構成に関する研究であり、駅との連携、吹き抜け空間の存在、着座空間の位置関係などを明らかにした。調査対象は比較的大規模なスケールのものであるが、歩行空間・着座空間を考える上でスケールは重要であり、今後検討される必要があると思われる。

□歴　　史　　座長：河田克博

028（高橋）は、Ｃ・Ｒ・マッキントッシュの家具デザインの特徴に関する一連の論考で、今回は、マッキントッシュの家具における、白ペイント塗りと金属打ち出しパネルの全体像について、その特徴と時期を具体的に指摘している。このことを踏まえ、マッキントッシュの家具デザインにおける特徴は、大まかに４つの時期に大別できると考察し、金属打ち出しパネルなどは第２の時期としている。そして、初期の伝統的形態からアール・ヌーボー的な造形へ、一転幾何学的構成へ傾斜し、さらに装飾的要素が加わるという変遷過程を結論付けている。マッキントッシュの家具デザインの作風変化を時間軸で整理した、歴史的に意義深い考察といえよう。

029（下村）は、ローマのシスティーナ礼拝堂における芸術空間の壁面装飾の変遷を、断片的に残された絵画史料などから、全４期に分類・考察したものである。わずか60年余りの間に次から次へと装飾プランが変化した理由は、ローマ・カトリックの最高位であるローマ教皇

の礼拝堂だからこそ、歴代４人（５人）の教皇が個々に教皇としての権威を象徴しようとしたために形成された、としている。そして、結局は最終的統一感を与えられなかった装飾プランではあるものの、ミケランジェロの描いた「最後の審判」の圧倒的迫力によって、現在の壁画空間が支配されていると指摘している。宗教的空間のインテリアの変遷を考察するうえで興味深い論考である。

030（東田）は、イタリア・ルネサンスのヴェネツィア派の画家ティツィアーノの作品『ウルビーノのヴィーナス』における室内空間の構図とヌードの存在感に着目し、作者ティツィアーノの作画意図を考察したものである。分析の観点は、２つの消失点、光のあたり方、色の配置の３つであるが、とくに消失点の捉え方について、会場から、消失点を変化させる図法の基本が理解されていないのではないか、との指摘があった。単に視線を画面に対して下げる基本的な効果を意図したもの、との指摘である。筆者も認めた指摘であり、その点は今後の課題といえる。

031（八代）は、ウィーン出身の建築家で、とくにスウェーデンではインテリアデザイナーとしても有名なヨセフ・フランクのインテリアデザインに関する考察である。彼の活動状況の紹介と、家具、テキスタイル、日用品、建築について、ごく概要を述べている。ヨセフ・フランクは、日本ではあまり知られておらず、おそらく日本では初めての概報であり、彼の業績を丁寧に分析し、作品の比較評価を客観的に考察することで、今後の成果が大きく期待される研究内容といえる。

032（織田ら）は、戦前における日本の客船インテリアについて、時代背景、船会社、設計者の観点から、その特徴を考察したものである。とくに船会社については、その歴史・航路・デザイン決定の違いから、デザイン様式が異なることを指摘し、日本郵船は西洋様式調、大阪商船は日本調であると考察している。また、外国航路の客船インテリアは、様式面から３期に区分できるとし、初期の西洋様式調から次第に変化し、第２次世界大戦前には日本調のデザインが主流になったと、その変遷過程を考察している。客船インテリアには、中村順平や村野藤吾など著名な建築家も関わっており、意義深い論考であった。

□計画　教育コーディネーター

座長：北浦かほる

教材や教育方法に関する３題とインテリア及びその職業分野に関する３題である。その中、035は発表者が無断欠席したため口頭発表は削除される。033（加島他２）は、レッド＆ブルーを題材とした職業訓練のための教材開発をテーマとしたものである。レッド＆ブルーを作業用椅子にリ・デザインしてそれを学生に製作させた過程を示し、教材のあり方を検討している。発表者の所属している職業能力開発総合大学校の教育目標やカリキュラムにおける、インテリア加工実習科目の位置づけが充分把握出来ていないため誤解があるかもしれないが、加工実習では一般的家具の継ぎ手や納まりを学ぶ必要がないのか、初心者でも加工が容易な教材が適切なのかに疑問をもった。質問の仕方が不適切であったためか発表時には明快な回答が得られなかった。034（小川他１）も職業能力開発総合大学校の内装施工実習に関する教材開発に関連した発表である。インテリア系から建築系への移行に伴って、実務訓練中心のカリキュラムに建築系科目が多数加わり短くなった実習時間を有効に使う方策として、木造やS造のキット化した模擬家屋を使うと言う提案である。内装施工実習時間の確保を準備時間の短縮で補っている。時代的には実際の公共の空き空間のリフォームやコンバージョンなどに内装施工実習を活用出来るようなシステムを整えていく努力が求められる。036（灰山）は近代/現代住宅の課題は実体よりも関係性の創出に優位をおく設計思想であることを、ハマースホイが室内画で試みた実験をCADによって再現することで検証している。すなわち、一定の平面構成をもつ小住宅でも、視点設定の仕方次第で変化に富んだスペースを創り出せることを示している。そして豊かな空間構成は３次元の部屋そのものよりも、人の視点や時間による日射の変化を通してスペースをデザインすることで２次元的に捉え表現できるとしている。２次元で表現されたスペースによって３次元空間がより豊かに変身できるということは興味深い。037（角本他３）はIC有資格者10人への聞き取りでインテリアコーディネーターの業務の実態をまとめている。建築領域とインテリア領域との線引きは難しく、個人の意識、企業の種類や規模によってその傾向も異なっており、インテリアは非常にあいまいな業種であることが分かる。そうした実態をうまく説明し、まとめていくための創造的な視点が求められている。038(奥村他３）も同様にインテリアコーディネーターの業務に対する評価を、メール登録しているIC資格者にネット調査した結果である。前編でも同傾向であったように、領域の広さとあいまいな職種であることから明快な結果が得られていない。何を明らかにしようとしているのかが明確に意識されていない。一般的な実態調査ではなく、例えばICとして満足している人達の仕事内容を把握することでICの職域を模索しながら確立させていくなど、の明快な方向性が不可欠である。

□人間工学　①　　座長：白石光昭

039　学習机の囲み空間による集中力に関する研究（１）：本研究は次編との連続発表であり，物理的環境である学習机をパネルで囲うとの手段が子供の集中力にどのような影響を及ぼすかを生理面（心拍数、瞳孔の大きさ、瞬目）、動作面（足の動き方、アイマークレコーダー）、心理面（アンケート、ヒアリング）を調査し、さらに集中力向上の評価指標としてクレペリンテストを実施し、総合的に両者の関係を探ろうとするものである。本編では、パネルの囲み方とアンケートやクレペリンテストとの結果についてまとめている。結果としては、高さ70cmのパネルで机全体を囲む場合の評価が高い結果となった。ただ、質問にもあったように被験者となる子供の座面高が適正とは考えにくい点や、被験者数が少ない点が大変残念である。

040　学習机の囲み空間による集中力に関する研究（２）：本研究は、前編で説明をしていない生理面や動作面とクレペリンテストとの関係についてまとめている。本編の結果からも高さ70cmのパネルで机全体を囲む場合の評価が高い結果となっている。従来から知られている方法であるが、多くの方法を利用して、結果を分析しており、良く検討されている研究であろう。今後実験を継続し、さらに信頼性の高いデータを得ることができるよう期待したい。

041　人の開閉行動における取っ手の視覚情報に関する研究：本研究は、ドアの取っ手（円弧形、コの字形）を利用した開閉行動を対象に、視覚の面からどのような情報を得ているかをまとめようとした研究である。筆者の先行研究も参考に、「操作」「使い心地」「視認」「印象」の４つの要因を抽出し、それらを良い評価と悪い評価に整理し、図式化している。今回の実験はあくまで視覚のみであるから、これをもとに実際にドアを開ける行為を被験者にさせ、さらに検証を行う必要があると考える。

042　トイレブースにおける折戸と開戸の特性：本研究は、トイレブースにおける折戸と開戸使用時におけるユーザの使用状況を、出入り時の足の踏み位置や動作時間そして筋活動度等から実験的にとらえ、開戸と折戸を比較検討している。被験者が２名と少ないので、被験者を増やし、信頼性を高めることが望まれる。また、開戸・折戸以外に回転扉も出てきているので、３つの扉それぞれの長所・短所を総合的にまとめたデータ表を作成してもらえると、設計者やユーザにとっては有益なデータとなるであろう。

043　インテリア空間における動線の有効利用に関する研究（３）：階段や曲がり角などの歩行時において、腰部や膝へのひねり等、身体への負担がある。これをやわらげるための一つの対策として、筆者たちは縦手すりをあげ、その有効性を筋活動・床にかかる重量・手すりにかかる力等をもとに検証している。フロアからも縦手すりは有効であるとの意見が述べられた。今後は、痛みを伴う一時的障害者を含め、被験者を増やし、有効性を確認する必要がある。また、縦手すりをどのようにデザインするべきかについても検討してもらいたい。

□人間工学　②　　座長：藤村盛造

044　正座時の身体負担軽減に関する基礎的研究の発表で結論では主観的評価として10°～15°の前傾により、姿勢から最も高い評価が得られたとしている。これはマンダールの事務椅子、前傾座面で姿勢を正す方法から上馬姿勢をヒントに研究されている。

045　人体寸法の直近のデータを知りたいと思いました。考え方は重要で今後の参考になります。

046　からだにあったいすの定義への提案「いすの定義」は結論づけられてはいないが、方向として参考になるものである。

047　今後のデータの集積が期待される

048　椅子の座面、背もたれの角度を個々に知り平均的なテスト角度を知らしめていただきたかった。

□パネル部門　設計・デザイン他

座長：高屋喜久子

049　愛知県の森林公園に抱かれるように建てられた「呼吸する家」は、周囲の森の気を室内に取り入れて自然や野生と一体化させる空間構成をなし、森に浮かぶ船のようでもある。研究者の「建築設計は環境設計である」という視点が貫かれた好例で、1983年に設計された家に育った長男が母屋の隣に居を構えるにあたって、設計を依頼したのが本研究となった。次男の家も建築中で、次回の研究発表にも期待したい。

050　昨年の発表からさらに改良を進めた本研究では、色をインテリアとの調和性を考慮して白いブロック体へと変更した。ペン立てや本立てなどのステーショナリーから、傘立てや空間の間仕切りへも発展させて、さまざまな組み立て例が発表された。１個300円程度の単価を想定しているとのことで、パッケージの工夫なども加えて、多面的な可能性を持つインテリアブロックの製品化が期待される。

051　学内のゴミ処理に目をむけた、ゴミ箱の提案である。ゴミの量を少なくするという意識はないのかという質問に、台湾ではその考えはなく外で購入するお弁当の類いのパッケージが膨大な量になるとのことで、そのゴミの量を一日２回計測し調査した。データ結果をゴミ箱のデザインに反映させ、試作品を制作した上での使用実験など、次のステップへの発展研究が望まれる。

052　木質の軽やかなスライドドアの提案で、気配を消すというよりは、良い意味で気配を感じる間仕切りで

あるとの意見もあった。実際に助成金がおりて製造会社との共同開発が始まろうとした時点で、メーカー側の都合で保留となっているアイディアである。デザイン的にも洗練され、設計面など詳細な検討を要する点もあるが、早い量産化が待たれる着実な研究成果である。

053　子どもが幼稚園の図書室でどのような行動をするか、詳細な動向調査に基づいて、発表がなされた。ふたりで図書室に来ても中で一緒にいる場合、短時間で退室するが、室内で別々の行動パターンをとる場合は比較的長く滞在するようで、70分以上の実績報告もあった。絵本の部屋は、ある意味パーソナル空間でありパブリック空間でもあるという興味深い研究であり、詳細な動向調査が評価される。

054　和紙を漉いていた古民家を改築して、隣に建てられた在来工法の家から移り住んだ夫婦は、ふたりとも公務員として忙しく働いている。二人暮らしの日常生活と、行事の際に人が集まるギャップを工夫して、空間設計がなされた。施主の奥様と設計者である発表者が、女性側からの使い勝手を強く主張して、大工さんを説得して作り込んでもらった部分もあり、女性の視点が実現された好例と言える。

055　現行の椅子数点と、研究者が前回制作した試作椅子について、座面の定点観測による実験調査に基づいて、「座り心地のいい」椅子を作り上げた研究である。研究の題名を「座り心地のいい木製椅子」にしてはどうかという意見が、オフィス家具の観点から出さており、同感である。詳細な実験結果を活かした今回の新しい試作椅子は、良好な評価が得られ、研究の成果を結んだ。

■平成21年度運営委員会だより

□総務委員会

白石光昭　幹事

総会以後の活動といたしましては、総会においてご承認いただきました「20周年記念事業・学校用家具のデザインコンクール」の実施にむけて、総務委員会を開催し、実行委員会の開催、審査委員長の委嘱、応募要領の作成等を随時進めてきました。しかし、９～10月頃に応募要領等細かな内容をお知らせする予定でしたが、事務局の不手際で遅れていることをお詫びいたします。大変遅くなりましたが、この会報にて、応募要領を公開いたしますので、皆様ふるってご応募ください。

また、今年度は大会を金沢学院大学で開催していただきました。総務委員会としてはあまりお手伝いはできませんでしたが、無事終了いたしたことは、ひとえに実行委員長棒田先生はじめ実行委員の方々のおかげであり、ここで御礼申し上げます

□広報委員会

湯本長伯　委員長

１）事務ホームページの更新を行った。皆様の情報提供を、引き続きお願いします。
　またホームページのＵＲＬは、
　http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/ です。

２）広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在33号）。
　皆様の、一層のアドレス登録を、お願い致します。
　http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/mail-news.html

３）会報発行を行いました。大会後直ぐには発行出来ませんでしたが、記録を中心に種々の情報をお届け致します。
　http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/46.pdf

□国際委員会

AIDIA役員会が昨年末、北京で開催！
－第６回アジアインテリア学会大会は
中国で実施に急変更－

加藤　力　委員長

昨年末の12月２日（水）～５日（金）、第20回中国インテリア学会大会に合わせて、中国北京でAIDIA（アジアインテリア学会）役員会が開催された。この会議に日本インテリア学会から加藤国際委員会委員長（副会長）が参加した。４日間に及ぶAIDIA 役員会議の経過および結果について以下、報告する。

その前にAIDIA の現状について簡単に解説したい。アジアインテリア学会は2000年以来、韓国、中国、日本の３国の順番で、２年ごとの持ち回りで、主催国および事務局を担当しながら、大会の開催、論文集や作品集の発行、あるいは学生ワークショップなどの国際的行事を分担してきた。

一昨年の2008年の中国の鄭州市で開催された第５回大会以降、中国が主催国としてその業務を受け継ぎ、担当し、今日に至っている。順番からいえば今年、2010年の第６回AIDIA 大会は日本が担当し、主催する予定であった。

そこで、第６回AIDIA 大会を日本の大阪で開催（第４

回、日本での大会は東京有明ビッグサイトで実施）すべく内々で下準備を進めていた。そうした中で、先般の金沢での日本インテリア学会理事会（10月24日）において第６回AIDIA 大会を大阪で行うことについて承認がなされ、合わせて第22日本インテリア学会を併合して同時同場所で開催することも決定された。

このような経緯のなかでひらかれたAIDIA役員会であった。まず初日、現在の主催国である中国（中国インテリア学会）から次のような提案があり、これについて討議が行われた。

１）アジアインテリア学会の発展のためにAIDIA新メンバーにタイ、マレーシア、フィリッピンの３国を加入させたい。（それらの国はすでに了承済み）

２）AIDIA事務局を移設させていくことにはロスや混乱が多いため、一カ所に固定したい。それについて中国が担当することはやぶさかでなく、むしろ中国に固定したい。（以前から中国と韓国の両国で事務局設置を共に主張）

３）６カ国となったAIDIAを新たなルールで運営したい。ついては次回、2010年、第６回AIDIA大会を中国で開催したい。

４）その他、新たなルールの細目等。

以上の議題が検討された。尚、この場で、すでに第６回AIDIA大会は日本での大阪開催準備の状況を説明して理解を求めた。

次の日、すでに中国側に招待を受けて北京入りしていたタイ、マレーシア、フィリッピンの各インテリア学会代表者等を交えて、正式に３国のAIDIA新会員加入のための会議が開かれた。

最終日に至り、中国の強い主張と希望、それに、日本の現在の経済的事情、事務能力の限界、開催会場等の課題を勘案して、国際委員長の責任と判断において、第６回AIDIA 大会を中国に譲ることを決断し調印。新しいルールの細目を残して、AIDIA役員会を締めくくった。

最後に、第６回AIDIA大会の日本開催の準備の為に昨年来、御骨折りをしていただいてきた日本インテリア学会の関係者の皆様に、このような結果に至ったことについて、深いおわびと厚い感謝の意を表するものである。

□論文審査委員会

直井英雄　委員長

本年度平成21年度は第20号となりますが、現在、その応募論文８編の論文審査を行っています。論文報告集の発行は、もちろん年度内を目指しておりますが、若干遅れたらお許しください。

ところで、平成22年10月にAIDIA大会が日本で開催されることはすでにご承知でしょうが、それに向けて、例年通りAIDIA論文の募集がありますので、こちらのほうもどうかお忘れなく。論文誌の正式な名称は、「International Journal of Spatial Design and Research Vol.10」です。順番で、JASISが制作担当となりますので、従前同様、その業務を当委員会が担当します。いまのところ、４月半ば論文応募のエントリー締め切り、５月末論文締め切りというスケジュールで計画しております。ふるって応募してください。

■平成21年度支部だより

□北海道支部

小林　謙　　支部長

今回はありません。

□東北支部

若井正一　　支部長（日本大学）

今回はありません。

□北陸支部

棒田　邦夫　支部長（金沢学院大学）

この時期見学会の報告をさせてもらっていますが、今回は大会が事業のひとつで、見学会の実施はありませんでした。いまその疲れを癒しながら、事後処理に追われています。年明けにはすべての処理も終わって実行委員会の方々で打ち上げをしようかと考えておりますので、次回の会報にはその報告ができるかと思います。また、今大会には非会員の方々の参加もあったので、その方々への勧誘も働きかけようかと考えています。

□関東支部

岡田　悟　　支部長（共立女子短期大学）

関東支部の最近の活動を報告します。

１）見学と講演「現代インテリアとは」
　日　　時：平成21年11月７日（土）
　　11時～16時半

講 演 １：「商業施設の設計と現代インテリア」
齋藤修一氏（D&DCompanyCEO）
講 演 ２：「家具とインテリア」
田中康一氏（hhstyle.com副社長）
講演会場：hhstyle.com
（妹島和世設計、渋谷区神宮前）
見　　学：t’s原宿、ＹＭスクウェア
参加者：16名
内　　容：現代インテリアを考える今回の企画は、商業施設群の見学を含めて、原宿で開催した。講演では原宿に相応しく、最先端のインテリア事情を知ることができた。後半の見学では、t’s原宿、ＹＭスクウェアの設計者齋藤修一氏の解説を聞きながら見学することができ、大変有意義であった。今後も引き続き現代インテリアをテーマとした見学と講演を行う予定である。

２）現代インテリア研究会の活動

これまでの研究を基に、10月に第21回大会（北陸）にて「現代インテリアに関する研究　その１　現代インテリア研究の必要性」を発表した。また、以下の見学・調査を行った。

日　　時：平成21年５月24日（日）
場　　所：岩瀬家（登録文化財、小田原市鴨宮）

□東海支部

建部謙治　支部長（愛知工業大学）

東海支部では支部設立20周年記念事業として、９月中旬に中国における明・清時代の庭園建築の研修旅行を行った。庭園建築は上海の豫園、蘇州の拙政園、獅子林、網子園、滄浪亭、留園の６箇所の他、水郷・朱家角、周荘、寺院・寒山寺、虎丘、文廟や、上海の現代建築である中国銀行上海支店、中国環球中心等を５日間で見学した。参加者は13名。

また、12月５日には、これらの報告会として４名の講師による講演会を開催した。河田利香（大林組）、清水隆宏（岐阜工業高等専門学校）、濱田晉一（名古屋工業大学大学院生）各氏による上海現代建築や庶民の生活空間などの研修旅行の報告の後、名古屋工業大学教授の麓和善氏による「煎茶席と中国園林建築」と題する講演があった。煎茶と中国園林建築との関係や、日本の煎茶席20数例についてスライドを通して詳細に語られ、今回の研修旅行の意義や内容を改めて確認することができ、参加者一同、有意義な時間を過ごすことができた。会場は名古屋市TOTOマルチスペースで、参加者は41名で、この後有志による懇親会を開催した。

なお、今回の現代建築の視察においては、日建設計上海の孫剛氏、森ビルの李氏には何かとお世話になった。ここに支部を代表して感謝の意を表します。

□関西支部

小宮容一　支部長（芦屋大学）

７月25日（土）、神戸の竹中大工道具館と相楽園の見学会、事後に懇親会を開催した。

小雨にもかかわらず、９名が参加した。

10月24日（土）、25（日）開催された金沢での学会第21回大会には、関西支部会員と関係者の発表題数13題が参加した。24日の見学会・シンポジューム・懇親会にも大勢で参加できた。

いずれの報告も関西支部HP http://www.jasis-kansai.jp に掲載、写真も張ってありますので、御覧下さい。

６月25日（木）第１回のJASIS 22回大会＆ AIDIA 第６回日本大会の準備委員会を立ち上げ、５回の会議を重ね、11月18日（水）に実行委員会に移行してその２回目の会議を12月16日（水）に開催した。この会議に於いて、12月２日～４日中国北京でのAIDIA会議に出席した加藤力国際委員長から、2010年のAIDIA大会は中国で開催されることを会議決定したとの報告があった。私としてはここまでに会議参加の支部会員の並々ならない努力を考えると無念の思いである。

中国での会議の詳細は、本会報に掲載の加藤力副会長・国際委員長の報告を参照下さい。

この件に係るご意見は、E-mail ji@jasis-kansai.jp まで。

さて、今期の終わり３月末までには、講演会を１つ開催したいと考えている。

□中国・四国支部

大森豊裕　支部長（近畿大学）

１）支部総会報告

平成21年６月13日に支部総会を行い、活動計画・予算などを検討した。また、平成20年度中国四国支部表彰の卒業設計優秀作品の小冊子を作成した。

２）ミニレクチャー（学生向け講演会）の開催

・№13　講演者：高取邦和　氏（高取空間計画）
日　時：５月29日（金）（参加者42名）
演　題：「快適な体が快適な空間を作る」
・№14　講演者：西村正弘　氏（Ｎ　Ｄesign）
日　時：11月28日（土）（参加者12名）
演　題：「模型制作の実際」

３）見学会：
場　所：四国村＋ジョージナカシマ記念館
（桜製作所）
日　時：10月31日（土）（参加者：28名）

□九州支部

車　政弘　　支部長（九州産業大学）

今回はありません。

■研究部会だより

□歴史部会

幹事：河田克博（名古屋工大）

今回はありません。

□デザイン部会

佐戸川清　部会長（㈱ゼロファーストデザイン）

今回はありません。

□計画・構法部会

栗山正也　部会長（ＫＤアトリエ）

今回はありません。

□人間工学部会

白石光昭　部会長（千葉工業大学）

今年度も研究会（見学会及び講演会）を企画しています。今回は人生の１／３と言われる睡眠を対象に、ベッドメーカーの工場を見学し、さらに講演を頂こうと交渉中です。ベッドや寝具を毎日使用していますが、まだまだ寝具に対する意識が低いのではないでしょうか。この機会にぜひ意識を高めていただき、またメーカーの苦労されている点などもお聞きできればと考えています。開催時期は2010年３月26日（金）（ＨＰ参照）を予定していますので、ぜひご参加ください。また、今後の研究会の内容などを含め、部会への要望等がありましたら、ご連絡ください（mitsuaki.shiraishi@itchiba.ac.jp）。

□教育部会

河村容治　部会長（東横学園短期大学）

１）第16回卒業作品展および巡回展の開催

2009年10月19日（月）より25日（日）まで金沢学院大学５号館１階ロビーにて、第16回卒業作品展を開催した。全国から集まった30作品を展示した。作品の数は昨年に比べ若干減少したが、見応えのある作品が集まった。

大会に引続き本年も立川ブラインド工業（株）とインテリア産業協会の協賛で、東京の２ヶ所で巡回展を開催できた。タチカワ銀座スペースAtteでは、出品者の要望に応え模型も展示し彩りを添えた。会場の設営や当番に、東京近郊の出品校の協力を得ることができたのが今回の収穫である。初日夕刻、出品校・教育部会員・学生が出席して、オープニングパーティを開催した。卒業生によるプレゼンテーションがすばらしく、学生が真剣に聞き入っていたのが印象的であった。

◆タチカワ銀座スペースAtte展
10月28日（水）～11月７日（土）

◆インテリアフェスティバル2009
（東京ビッグサイト）
2009年11月11 日（水）～13日（金）

２）　卒業作品展優秀作品の選出

10月25日（日）展覧会場にて審査会を実施した。本年は、発想が豊かで世の中の動きを反映した作品が目立った。表現技術は安定感を増したと言える。最優秀作品賞の作品は「いろは」の文字を象った手すりのデザインで完成度が高く、満場一致の受賞となった。

［審査委員会］
審査委員長：高橋鷹志（学会会長）
委　　員：大会副実行委員長　角谷　修
大会実行委員：村上明彦
教育部会長：河村容治
教育部会幹事：見城美子

［受賞者一覧］（註：学科名称は卒業年度による）

◆最優秀作品賞
武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科
インテリアデザインコース　田中静香

◆優秀作品賞
大阪産業大学工学部環境デザイン学科　木野洋司
日本大学工学部建築学科　美濃　孝
金沢美術工芸大学美術工芸学部デザイン科
環境デザイン専攻　川崎　碧

◆奨励賞

熊本県立八代工業高等学校インテリア科　今村和博

長野県木曽青峰高等学校インテリア科

矢野太祐・山下一樹・吉岡　駿

越取一磨・丸山将吾・小笠原彩

タチカワ銀座スペースAtteでの第16回卒業作品展

□住宅部会

直井英雄　部会長（東京理科大学）

今回はありません。

□ＣＡＤ部会

川島平七郎　部会長（元東横学園短期大学）

今回はありません。

□インテリア学大系特別委員会

委員長　湯本長伯（九州大学大学院）

基本的な目次はほぼ出来上がりました。この後は、関係する部会等と摺り合わせを行い、さらに出版社との相談を進める予定です。前号に前段階の目次を掲載致しましたが、全くご意見を戴けませんでした。下記まで、何でも結構ですので、ご意見をお寄せ下さい。

interior@design.kyushu-u.ac.jp

■H21年度第1回理事・評議員会議事録

日　時：平成21年５月30日（土）11:00～12:00

場　所：千葉工業大学

出席者：上野、大森、岡田、小原（誠）、川島、河田、小宮、栗山、北浦、島崎、白石、高橋、建部、田邉、直井、西出、棒田、日原、松本（吉）、湯本、若井

１．会長挨拶（高橋鷹志会長）

これまで以上に、日本インテリア学会諸活動に対する協力の要請があった。特に、他団体との協力体制の確立について述べられた。

２．理事・評議員会開催定数の確認成立。

３．平成20年度事業報告（案）について

①主な会議・イベントの確認

②決算報告（案）の説明

上野総務委員長から、収入8,627,110円、支出8,627,110円（次年度繰越金3,823,066円）との説明があり、承認を得た。なお、決算報告（案）に一部記入漏れの指摘があり、確認・修正を行った。

４．平成21年度事業計画（案）について

①活動方針

資料に基づいて説明がなされ、承認された。

②予算（案）

上野総務委員長より、今年度の収入をもとに，予算案を作成し、会費の督促を行い，予算案通りに実行できるよう努力する旨の説明があり、承認を得た。なお、繰越金の転記ミスがあり、確認・修正された。

②役員・組織

役員・組織については、昨年度選任された役員の期間が３年であることから、今年度は昨年度と同様の体制であることが説明された。

５．入退会者の承認（西出事務局長）

2008/09/26～2009/05/24の間の入退会者が承認された。

なお、会費３年間未納者、住所不明会員10名、賛助会員担当者不明３社及び３年間会費未納５社への対応をどうするかについて検討された。その結果、未納者は未払いの会費を支払ってもらうことが前提だが、退会とすることとした。ただし、再入会の希望があれば、入会手続きを行う。

なお、賛助会員は最終的に５社のみとなり、賛助会員への学会からの運動・体制を変えていく必要があることが確認された。

６．研究部会の統廃合について（白石総務担当）

これまでの議論をもとに、住宅部会、計画・構法部会、デザイン部会の統合について、２部会の部会長から意向を確認し、同意を得たが、計画・構法部会の栗山部会長からは抜本的な改革、特に地方会員への不利益解消が必要との意見が出され、今回の統合については、研究協議会において検討することとなった。

７．20周年記念事業「学校教室用家具デザインコンペティション」について（白石総務担当）

記念事業として、前回の理事会で出ていた20周年記念事業について、今後の日程概要が説明され（応募締切りは2010年２～３月頃）、学生等の応募について依頼した。なお、審査委員長に藤村盛三氏に依頼したことも紹介された。なお、可能であれば、優秀何点かを選択後試作を行い、試作品をもとに最終の優秀作品を決定する可能性もあることが説明された。

８．平成21年度インテリア学会大会について（棒田北陸支部長、資料配布）

棒田邦夫大会実行委員長から、平成21年度日本インテリア学会大会の準備状況について以下の報告があった。

・10月24日（土）～25日（日）に金沢学院大学で開催する。
・１日目は見学会、理事会、シンポジウム、懇親会、２日目は口演発表会、講演会、作品展の予定である。シンポジウムのテーマは、「建築空間以外のエクステリアとインテリアを考える」を考えている。例えば、金沢のお菓子とインテリア空間、車のデザインとインテリアなど。

９．2010年度日本開催のAIDIAについて（小宮支部長、資料配布）

関西支部小宮支部長から当初AIDIAの実行に関して勘違いをしていたが、平成22年度大会と同時開催で関西支部で引き受けたい旨の回答を得た。一支部では対応できない点も多く、各所からの協力を得たいとのことで、まずは、AIDIA実行委員会を立ち上げ、協力して進めていくことが了承された。

なお、湯本理事から、ワークショップに関しては、韓国の希望を入れると膨らみすぎるので、適切な規模に抑える必要があるとの意見が出された。また、大会に比べれば、金銭面も含め負担は少ないとのことである。

韓国の状況を踏まえ、AIDIAと今後どのように付き合っていくかも検討すべきであるとの意見が出された。

10．その他

特になし。

（記録：白石、穴沢）

■学校教室用家具デザインコンクール応募要領

日本インテリア学会
学校教室用家具デザインコンクール実行委員会
（平成21年12月）

趣　　旨

日本インテリア学会は設立20周年を記念して、社会環境へ貢献する学会事業の第一弾として全国の会員、準会員はもとより一般を対象に小・中学校で使用される学校用家具デザインのコンクールを企画いたしました。

今日まで学校家具は様々な企業で作られ、使用されてきましたが、デザインは必ずしも満足されたものではありません。特に価格と機能が裏腹である市場では、普通教室用家具は特別教室を除いて児童生徒には不満が多いと考えられます。

学校家具のJIS改正が一方で討議されようとしている今日、インテリア学会会員が真摯に取り組み、児童・生徒や学生にとって、安全で心地よい家具や、学校インテリアの向上へ役立ちたいと願っております。

以上のような趣旨のもと、家具を含めたインテリアの分野から社会へ貢献すると共に、会員および学生の研究・調査等に対し多面的に支援を行い、当分野のさらなる発展を期待するものです。

当学会では今後もこのような企画を継続的に実施していこうと考えておりますが、今後はさらに試作に向けての検討や学会推薦家具の推薦制度などを考えております。

１．募集期間

平成21年12月１日（火）～
平成22年３月31日（水）
注：作品受付期間は、平成22年２月１日（月）～３月31日（水）とします。受取時間は、10：00～17：00とします。

２．テーマ・募集作品

学校教室用家具の机といす（単品での応募も可）

３．応募方法

(1) 応募者は所定の出品申込書に必要事項を記載し、作品の図面（提出資料の大きさはＡ２パネルで１枚とする）を平成22年２月１日～３月31日の間に事務局へ送付する。なお、締切日必着のこと。

(2) 必要な図面は、三面図（縮尺１／５または１／10)、詳細図、立体が理解できる図面とする。なお、立体表現は、パース、模型、模型写真のいずれかとする。

　また、使用予定の材料についても記述を必要とする。

(3) 審査結果は、平成22年（2010年）６月下旬までに連絡をします。

(4) なお、作品は返却しませんので、ご了承ください。

　（返却希望の方は、宅配便等の着払い用紙に必要事項を記入し、作品とともに同封してください。）

４．応募資格

教室用家具に関心のある方はどなたでも応募できます。なお、個人・グループを問いません。

５．応募規定

(1) 未発表の新たなデザインであり、商品化が可能な作品であること

(2) 応募点数については制限しない

６．選考基準

(1) 実用的で機能性のある作品

(2) 日本インテリア学会が推薦できる作品

７．審査方法

審査は、提出図面等によるデザイン審査とします。

８．審査委員（予定）

藤村盛造、高橋鷹志、井上昇、島崎信、直井英雄、西出和彦、橋本都子、企業側より２名（交渉中）

９．表彰

最優秀賞　１点　（賞状、副賞　賞金 200,000円）
優 秀 賞　２点　（賞状、副賞　賞金　50,000円）
佳　　作　２点　（賞状、副賞　賞金　20,000円）

10．審査発表

平成22年６月に開催する平成22年度日本インテリア学会総会にて発表する。表彰は、平成22年10月に開催する日本インテリア学会大会（近畿大会）にて行う。

11．作品の取り扱い

応募作品の発表に関する権利は日本インテリア学会に帰属します。

12．応募作品の取り扱い

(1) 応募作品に関する知的財産権などの権利は、原則として出品者に帰属します。

(2) 応募にあたっては作者自身で権利保護の処置を講じてください。模倣，盗用など他所の知的所有権を侵害する疑いがある場合には、受賞などを取り消す場合があります。

13．問い合わせ先

千葉工業大学工学部デザイン科学科　白石研究室気付
学校家具デザインコンクール事務局
住所：〒275-0016　千葉県習志野市津田沼２－17－１
電話：047－478－0463　FAX 047－478－0569
メール：mitsuaki.shiraishi@it-chiba.ac.jp

■連載『インテリアの行方』

ー部品の工業化の先にー

川島平七郎（居住環境研究所）

私が会社に入り仕事を始めたのは1971年ですが、以後30年あまりの間に、建築の工業化には大いなる進展がありました。最初の仕事は、開業したての京王プラザホテルのバスユニット（設計：日本設計、製作：日立化成工業）を点検することで、ホーロー洋風浴槽の錆のチェックをしたのですが、客室は約1000室あり、１室の調査に３分かかるとするとなんと3000分（50時間！）もかかることを知りました。工業化は、その当初においてはまず規格化・量産化でしたが、同時にクレームの量産でもありました。初期のバスユニットは、東京オリンピック時のホテルニューオータニでは鋼板の防水パン方式（製作：TOTO）でした。パシフィックホテル茅ヶ崎のムーブネットはFRPカプセル方式（設計:菊竹清訓、製作:日立化成工業）で、そのモノコック空間の斬新さに大いに惹かれました。

ホテル用バスユニットの成功は華々しく、特定物件のためのクローズド部品から汎用デザインのオープンシステムへの転換とともに、マンションへ、戸建住宅へと波及していきました。同時にキッチンやトイレユニットが作られ、配管ユニットが検討され、JIS原案も作成されました。さらに収納間仕切りユニットやシステム天井は内装システムへと発展して、インテリアモデュラーコー

ディネーション（IMC）も検討され、また、現在のSI住宅の元になるKEP住宅（旧公団・量産試験所）が建設されました。

キッチンユニットは、軽量鉄骨フレームにボックスや機器類をセットしたルームサイズのユニットが試作され、芦屋浜ASTM（設計施工:竹中工務店）のような積層構法では有効とされましたが、さすがに大きすぎて不便なため、後に開発されたシステムキッチンにとって代わられました。現在は、ビルの給湯室やワンルームマンションに使用されています。これら要素技術の集大成が実験住宅NEXT21（企画：大阪ガス、1993）でしょう。環境共生やコジェネレーションなども加えた当時可能な現代的手法を満載し、自由な設計を一定のシステム上で実現することが目標とされ、居住実験によるフィージビリティもなされました。ここにおいて主要テーマは、規格住宅の大量生産によるコストダウンから、高品質・多様化・多機能化・環境性能に大きく一歩を踏み出したといえるでしょう。

1980年頃の国の住政策は、年間１万棟の量を前提として100㎡のセントラルヒーティング付住宅を500万円台で作るHouse-55プロジェクトが話題でしたが、社会の要求は量から質へと転換しており、住宅部品化の究極の狙いは、高品質の多品種少量生産を工業化ベースに乗せるオーダーエントリーシステムとなりました。

一方、私自身が考えて開発・実験していたのはFRP地下ユニットでした。給水タンク用のパネル（金型成型SMCによる量産化が行き過ぎ、超低価格でした）を表裏反転させて住宅の収納用地下室に転用したり、もっと小型の地下収納カプセルは商品化目前まで進めており、実は小原二郎先生のご自宅（設計：栗山正也氏）にモニターとして試用していただきました。通産省（当時）の新住宅開発プロジェクトの目玉にも取り上げられましたが、研究のみで終わり発売には至りませんでした。

長く公共住宅の核となったKJ部品は民間主導のBL部品へ発展するとともに、国の住政策はパイロットハウスを初めとしてプロジェクト方式で進められ、また、業界ではバスユニットはホテルからマンションへ、キッチンユニットはシステムキッチンへ、と激しい開発と競争がなされ、建築の工業化をテーマとしていた私には、とても刺激的な時代でした。国主導で住宅生産にも技術開発という概念が広く定着したのです。また、潜在的なニーズを明確な目標に整理し、それに向け研究開発をすることが当たり前になったのです。

今後の在り方としては、民間企業の単純な開発競争と建築生産の合理化だけでは、つい最近の政治・経済の世界であった規制緩和による無原則の競争社会が悲惨な結末をもたらしたように、もはや有効ではないでしょう。多様なデザインを可能にするSI住宅や、それを支援するオーダーエントリーシステムなどは、現代の目標となっていますが、住政策を牽引してきた旧建設・通産省や公団の役割が様変わりした現在、推進母体がありません。大学や学会がイニシアティブをとり、建設・不動産業、住宅メーカー、建材・設備メーカー等に呼び掛けて、新しい学会・業界横断的な協同作業が求められていると考えます。オープン部品化のルール作りや３Ｒに寄与する方策等の共通基盤の上にこそ、企業間の自由競争が有意義になると思われます。

最近、かつてのVANジャケット社員が起こしたシャツメーカーの代表者がTVで取り上げられて、自分で欲しいもの、市場で高額だが手頃な価格で生産可能なもの、流行に関係なく欲しいもの、という商品化の３原則を述べていましたが、目新しさの優先されがちなインテリアの分野にも当てはまるのではないでしょうか。

■ 編集後記

本46号は、2009年度の2回目の会報です。お忙しいところ、原稿をお寄せいただいた執筆者の皆様に紙面をお借りして御礼申し上げます。

会報に関するご意見、ご寄稿などございましたら、広報委員会（interior@design.kyushu-u.ac.jpまたはJASISeditor@yahoogroups.jp）までお寄せいただければ幸いです。

（渡辺秀俊）

■日本インテリア学会会報第46号（2010.1.27発行）
編集者：渡辺秀俊、若井正一、湯本長伯
発行者：高橋鷹志（日本インテリア学会長）
広報委員会：湯本長伯、渡辺秀俊、平井康之、
若井正一、片山勢津子、平田圭子
白石光昭

■事務局
日本インテリア学会
事務局長　西出 和彦
〒113-8656　東京都文京区本郷7-3-1
FAX：03-5841-8515